

学院創立125周年・大学開学50周年

記念事業報

第2号
2008.7

- ・ 2008年 春。新生「桃山学院中学校」始動
- ・ 記念事業キャッチフレーズ決定
- ・ 新棟建設進捗状況

ここに集い、

SEQUIMINI ME

世界へ旅立つ



学校法人

桃山学院





桃山学院 一二五年

✦ 第2の25年間（1909～1934） ✦

桃山中学校の評価は高まる一方であった。府立中学校は10校を数えたが、私立中学校は桃山中学校だけである。1908年末、桃山中学校に入るための中学予備校（のち自彊学院）が東区清水谷（現中央区）に開校した。設立者、校長は浅野勇桃山中学校長であり、教員の多くも本学の教員であった。

その結果、桃山中学校の生徒数はさらに増加し、1910年には500名前後となった。「桃山」筆ヶ崎の校舎では生徒を収容しきれなくなり、新たな校地を求めることに

なつた。そのため、「桃山」の土地は日本赤十字社大阪支社に売却したのである。

大正時代に入った1912年8月、生徒たちは大八車で机・椅子を運んだ。桃山学院の歴史は移転の歴史でもある。川口居留地から西区江戸堀、「桃山」の地、そして「田辺」の地への移転である。

東成郡田辺村（現在の桃山学院高等学校の地）の新しい校地は現昭和町校地の1.5倍、面積は11431坪（約37,800㎡）もあった。田辺大根などが栽培され、あたりは二面畑地が広がる風景の中に洋風の校舎が出現したのである。四天王寺の南門の敷居に立つと、桃山中学校の建物が見えたという。「第1の25年間」で紹介した三神学校（のち大阪三神学校）は大阪市の市電敷設のため建物の撤去を余儀なくされ、移転後の田辺の校舎で授業を行った。その後、1915年に聖公会神学院（東京）に合併となった。

大正から昭和前期にかけて、本学はさまざまな出来事に揺れ動いた。生徒の同盟休校（1913年、1918年、大正天皇来校（1914年）、御真影奉戴（1915年）、飛田遊郭設置反対運動（1916年）、

校長の交代（1918年）、経営難から米国聖公会への売却計画などもあった。しかし、クラブ活動は活発で、相撲部、野球部、サッカー部などの活躍があった。

大正期の末（1925年）になると世界的な軍縮の結果、現役将校が配属されるようになり、学内での軍事教練が強化されていった。

経営的には、1927年にCMSの経営から日本聖公会の経営に移り、さらに1933年に財団法人桃山中学校へと移行していった。

大正時代から昭和にかけて、桃山中学校の社会的評価を高めたのはG.W.ローリングス校長（George William Rawlings）の働きが大きい。しかし、定年退職を経て英国に帰国する直前、病に倒れ大阪の地で亡くなられた（1933年4月）。新しく校長に就任したのは小泉秀前（前高等女学校校長であった。西口 忠／桃山学院史料室）

※ 3～5頁に関連コラム「歴史のいずみ」を記載しています。

CONTENTS

- 01 コンテンツ（目次）／学院歴史エッセイ
- 02 記念事業キャッチフレーズ決定
記念式典・祝賀会の開催日が決定
記念行事の実施計画について
- 03 桃山学院中学校開校
 - ・2008年春。新生「桃山学院中学校」始動
 - ・桃山学院中学校「開校宣言」
 - ・理事長式辞
 - ・講話 ・祝辞
 - ・歴史のいずみ
- 09 記念事業進捗状況
 - ・大学開学50周年記念館 総合教育棟（仮称）
 - ・昭和町キャンパス第二体育館（仮称）
- 11 記念事業寄付金
 - ・寄付金申込状況
 - ・凡例
 - ・芳名録
- 17 メモリアルインタビュー

＋ 記念事業キャッチフレーズ決定 ＋

ここに集い、世界へ旅立つ

桃山学院では、記念事業および関連行事を学院内外にアピールする方法の一つとして、「記念事業キャッチフレーズ」を作成し、各種媒体に掲出することとなりました。

国公立を問わず、自大学の優位性、特徴および目指す方向をキャッチフレーズに表し、受験生、保護者、社会に対して訴求していくという動向があります。

桃山学院は、学院を構成する総ての人々が常に心に留め置き、発展的未来への礎となり得る「記念事業キャッチフレーズ」の作成に臨むこととし、桃山学院教職員を対象に公募を行いました。

集まりました応募作品を公開の上、推薦投票を行い、5月13日開催の記念行事・式典委員会で検討しました結果、『ここに集い、世界へ旅立つ』を記念事業キャッチフレーズとして採用することといたしました。

委員会では、「集い」という言葉に「学院を構成する人々が周年を機に結集する」という表象が結実されている点、学院のキリスト教精神である「自由と愛の精神」および大学の教育理念として謳われている“世界の市民”への精神的昇華や、文字通り「世界」へ向かう拡がりを見せている点に着目し、採用を決定いたしました。

今後、記念事業関係広報はもとより、学院広報全般へこのキャッチフレーズを掲出し、各方面へ記念事業のアピールを行って参ります。

＋ 記念式典・祝賀会の開催日が決定 ＋

学院創立125周年・大学開学50周年記念式典・祝賀会の開催日が下記のとおり決定されました。

◆ 学院創立125周年・大学開学50周年記念式典・祝賀会 ◆

日時：2009年9月26日(土) 11:00～15:00(予定)

場所：リーガロイヤルホテル(大阪)

※詳細につきましては決定次第ホームページ等でお知らせします。

＋ 記念行事の実施計画について ＋

記念行事の実施につきまして、桃山学院では企画公募を行い、多数のご応募の中から、下記の企画について実施に向け検討することといたしました。

- | | |
|---------------------|------------------------------|
| ◆「大阪の未来について」講演会の実施 | ◆キリスト教記念講演会の実施 |
| ◆「500人のキャンドルナイト」の実施 | ◆国際ボランティアキャンプ大阪の実施 |
| ◆ボランティア講演会の実施 | ◆「エコ箸を作ろう」体験プログラムの実施 |
| ◆国際シンポジウムの実施 | ◆「堺・和泉観光文化検定」の設立および運営 |
| ◆お笑いサミットの実施 | ◆「聖公会・桃山学院の源流を訪ねて(ツアー旅行)」の実施 |

2008年4月
“新生”
桃山学院中学校
開校



歴史のいずみ

4

自彊学院と桃山中学校

自彊学院は勤労者と桃山中学校に編入学する受験生のための夜学校であった。法制史研究と東京裁判で知られる滝川政次郎(桃中14期)は自彊学院から桃山中学校に編入した。また昼間の空

いた建物は幼稚園として使用された。1909年に開園となった清水谷幼稚園である。設立者はやはり浅野勇で、東区でも最古の幼稚園であった。



2008年 春。

新生「桃山学院中学校」始動

4月5日(土)、晴天の下、桃山学院中学校の第1回入学式が挙行され、114名の生徒が富田敏之中学校長の入学許可を受け、晴れて桃中第一期生となりました。

式中、新入生代表の柴田隆史君が「これからは本校の教育方針に従い桃山学院の生徒であることに自覚と誇りを持って行動し、自主・自律の精神と良識を持った社会人になる為、学業に運動に励むことを誓います。」と高らかに宣誓しました。

桃中第1期生のみんな、入学おめでとう!

4月26日(土)には、桃山学院中学校開校記念式典が挙行されました。

開校を記念する日に相応しく、見事に晴れ渡った日和のもと、約300人のご臨席を得てトリニティーホールにて式典が執り行われました。高校PTAより寄贈された鐘楼の鐘の音が会場を満ち、竹林徑一チャプレンの司式、佐々木睦浩教頭の進行により開式。富田敏之中学校長が開校を宣言しました。第1期生として入学した114名の生徒がしたためた、6年後の自分への「誓いの手紙」が校長に託された他、高等学校クラシックギタークラブによる記念演奏、「桃山学院中学校 高等学校の歴史パネル展」が行われるなど、同校の開校を彩りました。

また、桃山中学校、桃山学院高等学校の卒業生で元読売巨人軍投手(1960年、シーズン29勝の戦績をおさめ沢村賞、最多勝、新人賞を受賞)の堀本律雄氏が祝辞を述べられました。

桃山学院中学校は、桃山学院高等学校との「併設型中高一貫教育校」として開校しました。中高の6年間で「夢の発見」「夢の確認」「夢の実現」の3つのテーマに分け、実践力を高める授業や、様々な学校行事、宗教教育を通じて、「世界の市民」となるための確かな力を育みます。

歴史のいずみ

5

二つの同盟休校

最初の同盟休校は4年生90名が1913年11月に8日間行った。理由は対校試合の応援に上級生が下級生を強制出勤させたことに対する反発である。二回目の同盟休校は大阪での陸軍特別大演習で大正天皇が講評の場として来校があり、翌

年御真影奉戴があった後の1918年4月、キリスト教教育に反発する生徒約300名が玉手山安福寺に立て籠もった。責任を取り、浅野勇校長は辞任した。

桃山学院中学校 「開校宣言」

桃山学院中学校

校長 富田 敏之

只今の開校のお祈りにもございましたように、主イエスキリストの恵みによりまして、桃山学院は本年創立124周年を迎えることができました。本学院は、124年間の永きに亘り、キリスト教精神に基づき、「真理の探究に意欲を燃やし学習に励む若者」、「全ての人を愛する神を畏敬し、他者の人格を尊ぶ若者」、「生命尊重と奉仕の精神をもって世界に貢献する若者」を育てる教育を進めて参りました。そして、9万7千を超える同窓生が、その精神を身に纏い、社会のあらゆる分野で活躍しております。

さて、この4月、学院に連なる皆様方が待ち望んでおられた中学校が誕生しました。そして、114名の第1期生を迎え、すでに中学校棟『聖マルコ館』での学園生活が始まりました。先の入学式から3週間が経ち、このあと、この場で、生徒一人一人の「夢」を記した「誓いの手紙」を預かります。

今日、生徒諸君が本校に託した「夢」と、決意の「誓い」は、生徒諸君それぞれの「夢」や「誓い」であると同時に、諸君を慈しみ育むご父母をはじめとする多くの方々や、その想いを預かる教職員・本学院の「夢」と「誓い」でもあります。

生徒諸君は、各自の「夢」や「誓い」が、自らの意志や努力と共に、多くの方々の期待と助けを得て実を成すものだと自覚して下さい。我々教職員もまた、そのことを重く受け止めて諸君の教育にあたります。

本日は、私たちの「夢」と「誓い」の実現を様々な面から支えて下さる校友諸団体および本校の姉妹校とも言うべき聖公

会関係諸学校のご代表にもご臨席賜っておりますが、何卒、この夢と希望に胸膨らませている蕾たちが、それぞれの花を咲かせ、これからの社会に実を成すことができますよう、私どもと共に支え導いて下さることをお願い申し上げる次第です。

本日、この開校記念式典にご出席いただいた全ての方々に、神様のみ守りが豊かにありますことを祈りつつ、ここに改めて「桃山学院中学校の開校」を宣言いたします。



歴史のいずみ

6

相撲部、サッカー部の活躍

相撲部は筆ヶ崎時代から創設されていたが、1902年に関西学生相撲大会に参加し、好成績をあげた。更に1920年には第2回全国学生相撲大会で竹田繁七は個人優勝、学生横綱位を獲得。準優勝も桃山中学校の坂本達也であった。

サッカー部も1925年の第2回関西中等学校ア式蹴球大会で優勝、翌年の大阪・紀和大会でも優勝した。1929年春、英国のグロスター公が来日された時、その御召艦サフォーク号の乗員と桃中のサッカー部が対戦した。

理事長 式辞

学校法人 桃山学院

理事長 坪 井 清

本年4月、晴れて桃山学院中学校が開校されました。

本日ここに開校記念式典を行い、皆様と共に桃山学院中学校の開校をお祝いすることができますことは、私たちの大きな喜びであります。

この日を待ち望んでおられた社会の皆様にあたたいご支援に対しまして、厚くお礼申し上げます。また教職員をはじめ関係者の皆様の情熱、ご努力に対しまして、改めて敬意を表し、感謝申し上げます。

桃山学院中学校は、桃山学院124年の伝統を礎(いしづえ)に誕生しました。桃山学院はその源流として中等教育に力を注ぎ、幾多の歴史の変遷を経て、いま、桃山学院中学校へと新しく生まれ変わりました。

中高一貫教育の6年間で難関大学に進学できる学力の向上を図ります。そして、キリスト教精神「自由と愛の精神」を身につけます。一人一人の人格と主体性を尊重した上で、互いに仕(つか)えあい、他者と共に生きるという精神です。この理念は桃山学院が一世紀を超えて、教育の根幹に位置づけ、保持し続けていたものであり、本中学校の開校によって、桃山学院としてこの精神を改めて確認すると共に、更に開花させたいと考えているところです。

そのために中学校棟・聖マルコ館は体験授業を行う屋上広場、礼儀作法を身につける作法室、エレベーターホールに聖書のメッセージによるステンドグラスを配置しています。また、高等学校で実践している「命の教育」プログラムを中学校での実施により命の

尊さを考える機会として参ります。

一人一人の「個性」と「いのち」を大切にする桃山学院において、桃山学院中学校も新しく生まれたひとつの「いのち」です。この「いのち」を大切に、大切に育て、そして、常に成長し続けることができるよう、私たちは不断的な努力を惜しみません。これから皆様と共に、桃山学院中学校の輝きに磨きをかけることによって、桃山学院の新しい歴史を築いていくことができますことを祈念して、私の式辞と致します。

ありがとうございました。



講 話

学院長 宇 野 徹

本年4月、桃山学院中学校を開校できましたことは、大きな喜びであり、その使命の重さを感じております。

106年前の1902年(明治35年)、私立桃山中学校が動き出し、4月15日に桃山中学校の開校式が行われました。この伝統ある中学校が、35年前に募集を停止いたしまして、今日に至ったのであります。したがって今般、新しく桃山学院中学校が開校されましたことは、桃山学院の関係者にとって言葉に言い尽くせない大きな喜びであります。

さて、桃山学院中学校・高等学校校長をされ、初代桃山学院大学学長の勝部謙造先生が、中学・高校長の頃を振り返って次のように言われています。高校・中学の教育内容も改善され、次々に卒業生を送り出すにつれて痛感した事は、有為な青年が大学進学のために苦しんでいる、高校教育が受験予備校の域を出ていない、そこで、学院の長年の懸案であった大学の設置のために熱心に祈り、それが神の御心であるという確信を得た、このように述べておられています。

また、桃山学院大学の目指すべき理想について大学設置認可申請書に次のように記されています。桃山学院大学の使命と目的は、第一にキリスト教精神を中心とした人格の陶冶であること、さらにその上に世界の市民として広く国際的に活躍し得る人材を養成することが目的である、と記されているのであります。

勝部先生が、大学の設置を考えられたのは高校教育が受験予備校化していた状況に対して、中学・高校・大学の一貫教育をすることによって高校の受験予備校化を解消し、さらにキリスト教精神を基本として生徒の人格を陶冶することにあつたということであります。すなわち、勝部先生は教育者として高校生が受験に追われ、学校教育が単に学科の成績を上げることだけに固執する教育のありかたに問題を感じ、それを解消するために学校教育の目的で

ある真の人間教育・人格教育に尽力したいという思いから大学の設置を考えられたのであります。

今回の桃山学院中学校の設立の意図は、中高一貫教育という面で、35年前にあった中学とは異なり中高6年間をかけて一貫した教育をするということでもあります。中高一貫の6年間の適切なカリキュラムとすばらしい教育システムを各人が目指す大学に進学できる学力を身に付け、世界に飛躍するための知性を養い、その知性を自分自身の為だけに用いるのだけではなく、世界の人々の和解と共存、そして、地球規模の問題の解決に生かす平和の使者を育てることにあり、また、神を畏れる心、隣人愛の心を育むキリスト教教育を実践することにあるのでございます。

まさに桃山学院の建学の精神であります「自由と愛」、「世界の市民」に従った人材を育成し、この社会に、この世界に送り出すために中高一貫の教育を行うのであります。この桃山学院中学校のこれからの歩みの上に、神様の豊かな導きとみ守りがありますようお願い申し上げまして終らせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。



祝 辞

卒業生(元巨人軍投手) 堀 本 律 雄 氏

皆さんこんにちは、桃山学院中学校開校おめでございます。

私は今、パーキンソン病を患っております。言葉がなかなか出ない時もありますけれども、少し辛抱して聞いて下さい。

私の人生は野球一筋でした。おそらく死ぬまで、寝ていても現役を送り続けるつもりであります。野球をやっている一番自分の為になったということは、身体が頑健になって、また意思が強くなったことです。

私は戦後、昭和21年に母を亡くしました。戦火の後、家族であちこち疎開していた母は病に蝕まれていたんです。そして「野球、野球」と言いながら永久(とわ)の眠りにつきました。その言葉が今でも耳の底に残っております。野球を頑張れと言っているのか、やめろと言っているのか、分からないうちに亡くなったわけです。だから現在になって、ある程度の成績を修めて母のことを思い出すと、ああ、野球を頑張れと言ってたんだと自分のいい方に考えております。

ここにおられる中学生の皆さんは第1期生で、私と同じですね。私も昭和22年の入学で、新制桃山中学校第1期生です。入学から3年間、日本橋の仮校舎に通っていました。なんば劇場の横に入って、サーカス小屋の端を抜けて、帰りは百貨店の中をとおって通学しておりました。

やがて昭和町の校舎が復興し、この場所に通っていました。それが今日、ここ昭和町へ55年ぶりに参りましたら、たいへん立派な校舎が建って、生徒さんが運動をやっておられました。ああ、幸せだなあと思いました。僕らの頃は食うものは無い、住むところは無い、着るものは無い。戦後のどさくさに紛れて育ったから、雑草のように強いかも知れませんが、生徒達は結構、おもしろくやっています。

学校へ行くのに朝、ゴザを担いで行くんですが、それは何をするものだと思いますか?ゴザを広げて、その上で賭けをやっていたわけですね。そういう生活を送っていました。このような新しいビルではなく、この場所に古い木造の校舎がありました。そういう時代に、生徒の中から陸上では100mを11秒フラットで走る選手、それから学生相撲では横綱が生まれました。野球は準決勝で敗れましたが、ベスト4校の中に入りました。その時は高校3年の昭和27年です。大学へ進む前の年ですから、野球などやっている場合じゃなくて、試験勉強しなきゃいけないんですが、そんなことは頓着なしにやっていました。それでも東京6大学の中の立教大学に入り、スバルタ教育の砂押監督から再教育を受けて、野球に対する考え方が変わりました。

私には4人の恩師がいます。一人目は桃山中学、桃山高校で、近代野球を教えてくれた有藤先生です。二人目に立教大学の砂押邦信というスバルタ教育の監督です。そして三人目は砂押監督の後任に來た辻 猛監督です。辻監督は「堀本という男は使うのなら1番で使わないと。2番で使う

とあいつは力を出さんぞ。1番で使ったらとてつもない力を出す」というふうなことを日本通運の吉田総監督に言ってくれたわけです。四人目はこの吉田さんです。吉田さんは辻監督の言うことを守ってくれて、私を第一に「堀本、堀本」といって、酷使するくらいにのしたたかさで、投げ続けさせたわけです。それによって私の名前も全国区になりました。そして巨人軍に迎えられたのが昭和35年です。

今、ピッチャーは連投することはありません。しかし私の場合は、この間亡くなった稲尾くん、彼は23連投、私は16連投。今のピッチャーは1年間で200イニングいきません。ところが私の場合は364イニング3分の2、69ゲームを投げて、26完投、防御率2.00。こういう成績の選手がキラ星の如くいたわけです。金田あり、秋山あり、杉浦あり、稲尾あり、そういう連中と一緒にやってきたんです。だから少々のことでは驚きません。

戦後のどさくさの中でも、ここ桃山学院でのびのびと学生生活を送り、遅く育ちました。どうか皆さんも第1期生として、恥ずかしくないような学生生活を送っていただきたいと思います。人と約束すれば絶対に守る。今、校長先生と約束を交わされたいね。それを守って、しっかり勉強して下さい。

最後に、母校の野球部が甲子園に出場することを願っております。

今日はありがとうございました。

※金田＝金田正一、秋山＝秋山登、杉浦＝杉浦忠、稲尾＝稲尾和久



堀本律雄氏の経歴

昭和25年に桃山中学校を卒業。昭和28年に桃山学院高等学校を卒業後は、立教大学へと進学し、同大卒業後に日本通運株式会社に入社。同年に都市対抗野球大会にて準優勝、久慈賞受賞。昭和35年には読売巨人軍に入団し、同年に29勝の戦績をおさめ、新人賞、最多勝、沢村賞を独占受賞。昭和36年には、読売巨人軍のリーグ優勝、日本シリーズ優勝に貢献。昭和40年に現役を引退後は、大洋ホエールズ、日本ハムファイターズ、横浜ベイスターズにて投手コーチを歴任。現在、野球評論家として活動の他、プロアマの野球指導、技術向上に尽力されている。

大学開学50周年記念館 総合教育棟（仮称）

大学開学50周年記念館 総合教育棟（仮称）は、2009年に迎える学院創立125周年・大学開学50周年の記念事業の一つとして計画され、学生のキャリア形成、国際交流、外国語教育、ボランティア支援の充実を目的としています。

2009年4月からの供用開始に向け、着々と建設を進めています！

—建設工事の進捗状況—

2008年3月18日に起工式が行われ、建設工事の安全を祈願しました。

3月24日から作業区域内の植栽の移植準備が始まり、4月3日より構内各所へ移植を行いました。

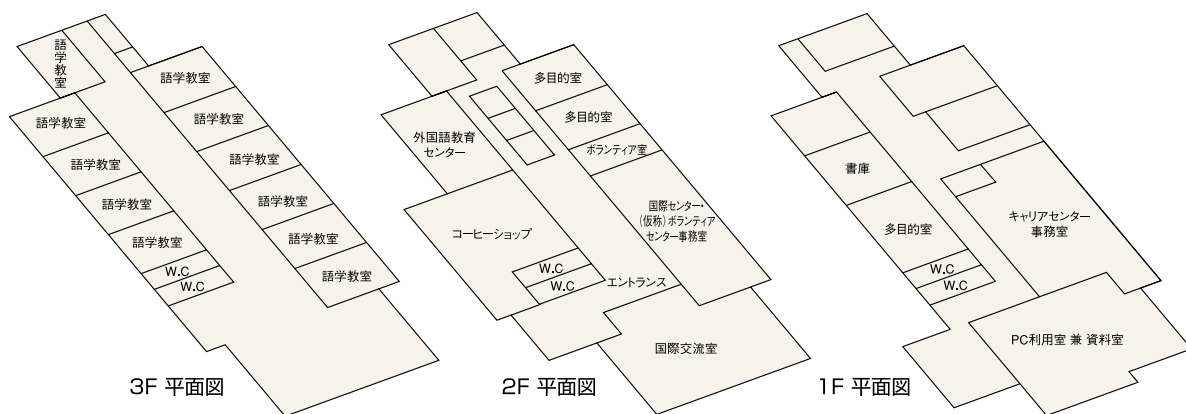
移植完了後の4月11日より、いよいよ建築敷地の造成作業に着手しました。建築敷地が斜面ということで、まず平盤化するため、斜面部分を切り開きます。斜面にH型鋼を建て、土止め工事を行った上で、約1,700㎡の敷地予定地の内、斜面となっている約300㎡の土砂を掘削し運び出しました。土砂の量はダンプトラックに換算し、およそ600台分。所要日数14日をかけての搬出作業となりました。

5月19日より杭工事（長さ25m～30m 直径50cm、70cm）の打設が開始されました。建築敷地を北と南に分け、まず北側部分の杭工事を行い、6月4日に終了しました。

6月5日より南側部分の杭工事が継続して行われ、北側部分は最終掘削作業を行っています。6月15日現在、延べ1377人の作業員が当建設現場にて作業に従事し、無災害にて工事を行っています。



▼総合教育棟 平面図



桃山学院大学プレ50フェスタ



6月1日（日）に、「桃山学院大学プレ50フェスタ」が実施され、高校生をはじめ、現役学生、大学同窓生、学生保護者、地域の皆様等、2,300名を超える来場者を得て、大盛況のうちに終了しました。

今年度は開学50周年を来年に控え、「プレ50フェスタ」と銘打ち、キャンパス見学会・文化祭・ホームカミングデー・記念シンポジウム等の記念行事を同日開催しました。

桃山学院大学のキャンパス全体で、学生企画をはじめ、種々様々なイベントを実施。特に今年度は、旧大学キャンパスである登美丘キャンパスへのツアーを行い、学生時代を過ごされた大学同窓生は懐古の念を抱かれたことと思います。

桃山学院大学は開学50周年を迎えるにあたり、大学開学の理念を振り返り、現在への発展の道程を再確認し、未来への大いなる進展を目指します。

昭和町キャンパス第二体育館（仮称）

昭和町キャンパス第二体育館（仮称）は、延べ面積4,599.76㎡、地上2階地下1階の規模で、地下階から1階吹抜のサブアリーナ、地上2階にメインアリーナを有し、バレー・バスケット・バドミントン・ハンドボール・鉄棒・吊り輪の体操競技など多種にわたる体育施設となります。

—建設工事の進捗状況—

最初に、地下階サブアリーナとなる約5m（天井の高さは8m）の地下空間を、地盤面に構築します。グラウンドの土（10tダンブに約2000台分）の掘削工事を行った後、1階の基礎部分の地面を締固める工事（地盤改良杭工法）を行ない、安定した支持地盤を形成させました。地下基礎部分も土質調査の予測値どおりの地盤が形成されており、非常に良好な結果が得られています。

6月15日現在、サブアリーナ基礎、建物の骨組みである躯体のコンクリートを打設する工事に執り掛かっています。コンクリートの強度や、鉄筋の径、数量等設計図書に従い、さらに品質のばらつき等まで監理し、設計監理者、施工者と打合せを重ねながら工事を進めています。

秋には、メインアリーナの鉄骨屋根の工事に執り掛かりますが、従来の構造形式とは異なる、張弦梁構造という特殊な設計となっています。この設計は、高価な巨大鉄骨材料を多用する設計ではなく、「鉄は引張強度に優れる」という材料特性を最大限に活かし、鉄骨総重量（今回使用量172t）を軽くし、下部構造への重量負担を減らすという特殊技術です。この工法は構造的、コスト的に優れている一方、高度な施工技術力が求められるため、工事開始直後から設計・監理者および施工者のほか各専門技術者が集まり、綿密な打合せを何度も重ね、

建て方への準備を進めています。

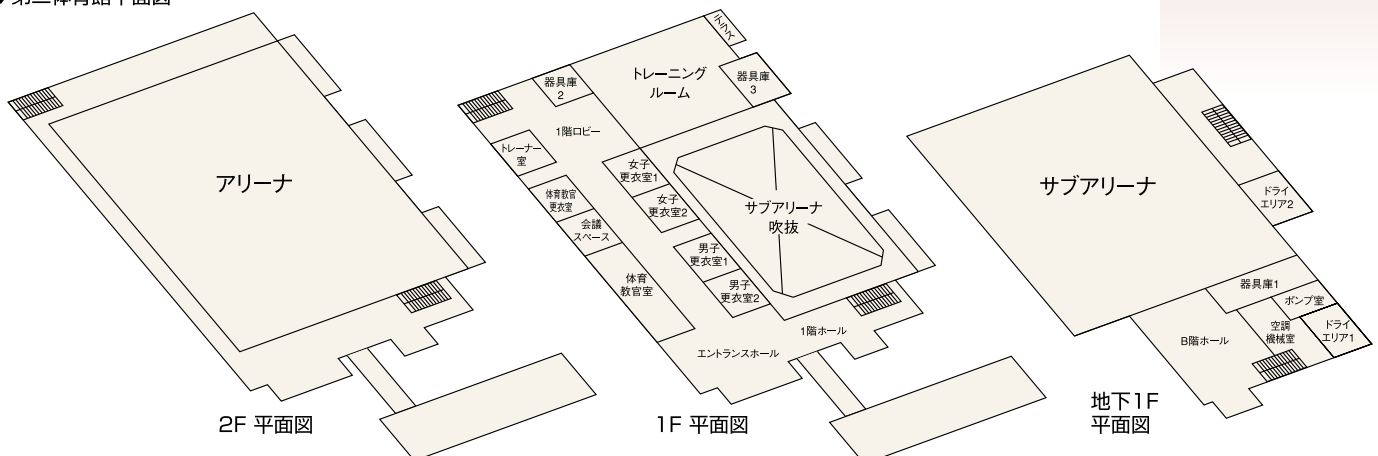
一連の外郭骨組み工事が進むと、仕上げ工事に取り組みます。（屋根工事・内部の仕上げ工事）

3月26日に起工式が執り行われ、4月より工事に着工。4月末で7%、5月末で20%と工事が進捗し、学校関係者と工事関係者との連携により6月末には28%と順調に推移しています。

2009年の4月には第二体育館（仮称）が完成し、昭和町キャンパスが更なる進化を遂げるべく、関係者一同一丸となって日々進行中です。



▼第二体育館平面図



Interview

桃大の誕生と成長を見守って

2008年6月11日(水)、元大学職員の穴田昭男さんにインタビューを行いました。
穴田さんは、大学開学直前の1959年1月に入職され、42年間奉職されました。
大学の黎明期を語っていただきました。

穴田 昭男さん

(元大学職員)



◆桃山学院へ入職されたきっかけ

1958年に大学を卒業しました。当時は不況の時代で、印刷会社で働いていました。そんな時、大学時代のゼミの教官から「桃山学院で大学を創る計画があるので、働いてみないか」と話があり、面接を受け翌59年1月に入職しました。

開学が間近で、大学事務の経験者も少なくて4月までの3ヶ月間はとにかく大忙しでした。

◆大学開学式(1959年4月15日)の様子

凄かったの一語ですね。キリスト教新教渡来100周年ということもあって、海外からカンタベリー大主教をはじめ、偉い方が大勢やって来る。一期生は桃高から進学した学生が多かったんですが、こんな大きな式典は経験したことがない。感激もひとしおだったでしょうね。

◆当時の学生の様子

一期生たちは手探りで自治会やクラブを立ち上げ、活動を始めました。とにかく新しい大学を創るんだという意気込みが強く、教職員も一緒になって参加しました。

当時は施設不足が深刻で、体育の授業は金岡(堺市)の体育館まで行って実技を受けていました。それでも課外活動は強かったです。重量挙げはもったて小屋、アーチェリーはB館裏の狭いところで練習していました。施設が無い中で、学生たちがよく頑張ったと思います。自動車部は1959年の伊勢湾台風、1964年の新潟地震のとき、救援物資を運んで行きました。

◆桃大の基礎づくりをサポート、「友の会」

学生会の発足と同時期に、「友の会」(現教育後援会)という組織が発足しました。大学は出来たけれども、お金もないし、PTAのような組織もなかったので、物心両面で大学を育てていこうと、父母だけではなく賛同してくれる人たちが皆で組織したんです。地方にも出向いて、保護者に学生の成績とか学生生活の状況を説明する場を作っていただきました。今考えてみても、当時の大学としてはとてもユニークな組織であると思います。

◆学生参加の大きな行事

サマーキャンプの最初は1964年に松江と高松、この2箇所で開催された文化会や体育会の学生500人の参加です。一週間か十日ほど各々のクラブで合宿して、最後に「市民の夕べ」という催しがあって、教員の講演会や、学生の演舞だとか詩吟だとかを披露したようです。初期のユニークな活動に「船上大学」というのもありました。新入生のオリエンテーションです。船を一艘借り切って大阪湾を一日かけてぐるっと回る。その一日、教職員と学生がいろいろなコミュニケーションをとって、早く大学生活に慣れてもらおうと。これは学生たちもたまげたけれども、世間がびっくりしたようですね。新入生全員ですよ。1965年入学から905名。

◆当時の学生への対応

学生に対しては非常に厳しい対応をしていて、例えばカンニングをすれば、その期間の科目が全て無効になり留年が確定でしょ。

すると学生課長がやってきて「そんなに厳しくするなよ」と言われたりもしましたね。それでも、いい学生を育てる、いい加減な卒業生を出さないという機運が出てきた頃なんです。1966年には登美丘キャンパスが出来ましたが、教養課程を登美丘、専門課程を昭和町というふうに2年ずつに分けていました。グレード制といって、これだけの単位と科目を取っていないと3年には進級できませんよという厳しい制度で、昭和町へ行けない学生が沢山いてね、大変でした。

◆学院の設立者は…

学院創立80周年の八代理事長の記念の挨拶、これを読むと、素晴らしい人だなと思います。「本学院の創立に関し、歴史編纂の方々が苦勞したのは、何時頃、どなたがこの学院の設立者であられたかということであります」、だけでも、「この事は誠に学院の歴史にとって美しい逸話であります」と言っています。新島襄も福沢諭吉も大隈重信も桃山にはおりません、と。その時々学院長や、校長や、教職員が肥やしになって80年を続けて来たんだと。創立者が誰だか分からないということは、実は素晴らしいことなんだと、言ってるんですね。これは立派なことですね。

数多くの大学の思い出をお話いただき、インタビュー終了後には、久々に訪れた学内を回られました。いたる所で知己との邂逅があり、笑顔でキャンパスを後にされました。



歴史的な出会い

—G.W.ローリングス元校長のひ孫と澤井光造さん—

『記念事業報』創刊号(2008年1月25日発行)で、澤井光造さん(桃中第22期)のインタビュー記事を掲載しました。澤井さんはG.W.ローリングス(G.W.Rawlings)元桃山中学校長の思い出を熱く語っておられましたが、発行日の1月25日(金)に澤井さんがローリングス元校長のひ孫カミラ・サッキさんと面会するという「歴史的な出会い」がありました。

北京五輪でメダルを取る！

2008年5月19日(月)、北京五輪にシンクロナイズド・スイミング日本代表として出場する橘雅子さんにお話を伺いました。

橘 雅子さん

(06年社会学部卒、大学職員)



◆シンクロナイズド・スイミングのこと

「始めたのは小学校1年生からです。もともと浜寺水練学校に通っていて、そこでシンクロ部のエキシビションを見て興味を覚えて、母親にやりたいって言ったんです。」

「練習は、始めた頃は週3回くらいでした。高学年になるとほぼ毎日。週に5、6日くらい練習していました。」

「今のチームは家族以上に長い間一緒に居ます。部屋も一緒に、24時間一緒。今のチームは仲がいいって言われてるんです。」

―シンクロで今強い国はどの国ですか？

「ロシアが一番強いですが、スペインと中国、アメリカも強いです。カナダも強いです。ロシアがダントツでしたけど、今、伸びているのはスペインと中国ですね。」

―北京五輪への意気込みや目標をお聞かせ下さい。

「色は気にしてないですけど、メダルを取ることが目標です。北京五輪では、今伸びている中国が強いですけど、そして、ロシア、スペイン、中国、日本のメダル争いになると言われています。今までで一番厳しいんじゃないかと言われているので、とにかくメダルを獲ることです。結果は、頑張ったらついてくると思います。」

◆大学生のころ

―桃山学院大学を進学先に選んだ理由は？

「親戚のお兄さんが元々桃山学院大学に来ていて、大学祭に来たことがあるんです。

その時にすごく綺麗な印象を持って、いいなって思っただけです。もともと大学進学はシンクロではなくて、自分で決めたかったので、行きたかった桃山学院大学に進学しました。」

―学生時代の部活動について

「水泳部でした。試合に出場できる機会には出ていました。基本的にシンクロも競泳から入っていくんです。今でも練習前に、1時間くらい競泳をします。シンクロ選手でも日本選手権に出られるくらいのタイムの人いますよ。」

「ずっと水泳部の皆と一緒にでしたね。昼休みも芝生でバドミントンとかして。休み時間とか昼休みとか、空き時間は芝生の所にいました。」

―学生時代の夢は何でしたか？

「五輪出場はあまり考えてなかったですけど、大学3年生までナショナルBチームだったんです。その時は日本代表に入るのが夢でした。」

「ナショナルAチームに入った後も、大会が終わるごとに、また一から選考して選び直します。次々大会があるのでナショナルAチームに残ることが夢というよりも常に目標です。」

―競技者ではなく、一人の人間として、趣味や、夢は？

「こまかい作業が好きなので、シンクロを止めたならネイルアートとか、そういう仕事してみたいなと思っています。没頭して、黙々と細かい作業をするのが好きなんです。」

◆桃山の同窓へ

「大学の友達とは今でも連絡を取っています。同級生も五輪に応援に来てくれるんです。皆仕事に就いていて、働いている話を聞くと、それぞれ大変そうなんですけど、私の方がしんどい練習に耐えてるから、自分も頑張るわって言うてくれるんです。これからもうやって思ってもらえるようにになりたいです。」

インタビューを終えた後、すぐにシンクロチームと合流し、一週間の合宿を行うとのことでした。その後も北京五輪までは練習の日々が続くとのことでした。

大会や練習で家を離れることが多く、家族と一緒にご飯を食べることが少ないという橘さん。帰って来た時には家族みんなで焼肉を食べるのが楽しみとのことでした。

8月上旬には北京へ向けて出発。日々の練習の成果を遺憾なく発揮して、素晴らしい演技を披露してくれると思います。本人の言葉のとおり、

「結果は、頑張ったらついてくる」

カミラ・サッキさんはローリングス家の歴史を執筆中で、G.W.ローリングスの資料を調べるため来日されました。桃山学院に到着後、富田敏之高等学校長と面会の後、学院史料室に移動。保存している関係資料、特にローリングス元校長の写真を複写して提供しました。

澤井光造さんからG.W.ローリングス元校長の子孫に会いたいということを聞いていましたので、連絡を入れました。

昼すぎ、澤井光造さんと娘の澤井陸子さんが到着。ローリングス元校長のひ孫と教え子との「歴史的な出会い」が実現しました。この時、澤井さんは101歳になっておられました。

澤井さんはローリングス元校長との思い出を、一所懸命カミラさん

に伝えようと、なかなか出てこない英語を身体中から引っ張り出すようにして話しておられました。

しかし、別れの時が来ました。この「歴史的な出会い」があって、カミラさんの眼から幾筋もの涙が流れ落ちるのを見ました。

ローリングス元校長には三人のお子さんがいました。一人目がシャーリー、二人目がマーガレット、三人目がジェラルドです。カミラさんはマーガレットのお孫さんにあたります。マーガレットは英国で有名な女優でした。また、ジェラルドは天文家として知られていました。

(西口 忠／桃山学院史料室)



学校法人桃山学院

桃山学院大学

桃山学院高等学校

桃山学院中学校

学院創立125周年・大学開学50周年
記念事業報 第2号

2008年7月25日発行

編集 桃山学院創立125周年・大学開学50周年
記念事業事務局

〒594-1198 和泉市まなび野1-1
TEL 0725-54-3131(代表)

印刷 凸版印刷株式会社

「マルコによる福音書 第1章」より